

# 井出孫六 峠の軍談師

連作・秩父困民党稗史



# 出孫六 の軍談師

連作・秩父困民党稗史

河出書房新



# 峠の軍談師

―連作・秩父困民党稗史―

昭和五十一年五月二十五日 初版印刷

昭和五十一年五月三十日 初版発行

著者 井出 孫六

カバー写真 清水 武甲

発行者 佐藤 皓三

印刷者 大柴 守子

発行所 株式会社 河出書房新社

東京都千代田区神田小川町三の八

電話 東京二九二―三七一一

振替 東京一〇八〇二

定価はカバー・帯に表示してあります

目次

|          |     |
|----------|-----|
| 地蔵の微笑    | 5   |
| 峠の軍談師    | 33  |
| 霧と闇と軍律   | 89  |
| もう一人の鼠小僧 | 127 |
| 伝蔵紀行     | 171 |



# 峠の軍談師

連作 秩父困民党碑史



## 地蔵の微笑

——秩父風布組口碑より——





「いきばて」という言葉にどんな漢字を当てたらよいか、正確なところを私は知らない。「生き涯」とすべきか「行き果」とすべきか、いくつかの辞書を繰ったけれども、いずれにも「いきばて」という言葉の記載はなかった。かりに、この言葉を辞書に収めるとして、それが持っている含意を数行で説明することは至難のこととも思われる。さて……。

秩父に風布村を訪ねたのは、晴れた初冬のある一日であった。櫟の枝はすべて葉を落して、林の間を縫う小径には午後の陽が燦々とふりそそいでいる。谷あいの陽溜りには春を思わせるような温もりがあつて、散りしいた落葉のあわいから福寿草の黄緑の蕾が顔をのぞかせていたとしても不思議ではないような穏かな日和だったというのに、やがて道がいくつかの林をぬけてつづら

折れに最後の急坂をのぼりつめて尾根にたどりつくや、山の脊梁には身を斬るような寒風がうなりをあげて、峯から峯をかけぬけていた。そして尾根からは眼下にひとつの空間が展げ、ゆるやかなスロープには丹念に鍬の入られた畠地が、あたかも畳を敷きつめたように広がっている。

秩父の山波にわけ入ってゆくと、人は往々にしてこのような光景にぶつかる。すてに人里離れた山奥に來たと思つて峠を越すと、そこにまた人間の集落があつて、数百年の村の歴史が刻まれて息づいてゐる。——斜面に広がる畠地は、そこから掘り出されたに相違ない無数の大小さまざまな石ころを積んで土留めされ、耕されて天に至つてゐる。そして南に面した斜面の窪みに礎石が組まれて、そこに数戸の人家が肩寄せあつて建つてゐる。尾根から見おろすその景観は、一見、桃源郷と見まごうばかりだ。風布耕地もまた、そのような秩父の景観の一典型にちがいない。

秩父事件にあたつて、風布耕地はほとんど毎戸参加で最も果敢に蜂起に加担していった部落なのだ。このような桃源郷にあつて、人々はなぜ革命など企てたりしたのである？ と瞬間疑わずにはいられないのだが、やがて尾根をおりて耕地に近づき、水分を失つた石礫だらけのその土質に目をやれば、決してそこが春になつて桃の花が咲き匂うような豊かな里でないことが理解されてくる。

干上つた畠地に桑の根は露出し、烈風に枝は折れんばかりになつて、悲鳴をあげるように鳴つてゐる。根の強い桑なればこそ辛うじて生育しうるこの瘦せた土地、ここでは蚕は人々の生命線であつた。尾根から目に入る耕地の集落には大きな二階屋が目立つ。一寸見にそれは豪壯な構

えとさえ映ずるのだが、それは春から夏、そして秋にかけてびっしりとしつらえられる蚕棚の空間のためのものであって、その時人々は、蚕棚の下のわずかの空間に横たわって桑を喰む蚕のざわめきをききながら、昼の疲れを束の間のまどろみでいやすだけにすぎないのだ。蚕は「お蚕さま」と呼ばれ、上下に敬称をもつのは「お天道さま」と「お蚕さま」でしかないほど、耕地の中心にでんと坐っていた。

そのような中で、明治十五年、十六年、十七年と、繭価は無気味なカーブを描いて暴落した。西南戦役、台湾征討という二つの戦争の莫大な戦費のツケを、政府が農民に回した結果であった。しかも「富国強兵」の看板はおろすわけにかなかったから、徳川時代を上回る「収奪」が農村を疲弊においこんでいった。

「御一新とは何だったのか」そして「文明開化とは何をもたらしたのか」。農夫たちは深い疑惑にとらわれるよりもまず、飢えの恐怖にひしがれねばならなかった。

風布耕地の筆頭組織者大野苗吉は、仲間に次のように呼びかけたという。

「恐レナガラ、天朝サマニ抗敵スルカラ、加勢シロ」

そして同じ風布の組織者大野福次郎は、それまで筆を持ったことのない村人のひとりひとりの手をとるようにして、「自由党（＝困民党）入党申込証」を書かせていった。大野苗吉は明治十七年十一月四日の荒川沿いの激しい銃撃戦の中で、「ススメ、ススメ」と連呼しながら仲間の先頭を走るその後姿を最後にして、秩父の山野から姿を消した。たぶん、近衛の憲兵隊の銃弾に射

抜かれて、苗吉の野良着は鮮血に染められたのにちがいない。この日の戦闘で「暴徒」側は潰散する結果となったから、ついに苗吉の遺体は確認されず、野末に埋もれることになったのである。

苗吉の最期に比べると、大野福次郎の場合はまこと華々しさに欠けた。一斉蜂起に先立つ十月三十一日の予備行動の中で、福次郎は警官隊の待伏せにかかって、夜の恩出河原<sup>おんだしかわら</sup>で生け捕られ、熊谷監倉に送られることとなってしまった。

事件直後の秩父地方には「反動」の嵐が吹き荒れた。「暴徒」の側に加担することも権力の側に身を移すこともなく、ひたすら事件の経過を追って記録をのこした神官田中千弥の日記には、次のように書きとどめられている。

「扱テ暴徒潰散ノ後ニ至リ警察官吏ハ郡中一般皆暴徒ナリ。……小鹿野町ニ出張ノ警官等ガ人民ヲ訊問スルノ状ハ警吏自ラ三尺計ノ生木ノ棍ヲ携持シ、訊問所ニ入ル者ヲバ未ダ何等ノ事ヲ問ハザル前ニ先面部頭部ヲ不言一擲、或ハ二三擲後訊問ニ及ブ。……或ハ極寒ノ氣候ニ衣類ヲ脱シメ、庭上ノ樹木ニ懸下シ、或ハ拘留シ、其ノ残忍苛酷ナル見聞スル者切歯痛歎セザル者ナシ。人之ヲ謂テ小鹿野訊問所ノ警官ハ暴徒二ノ手也ト称ス。……」

大野福次郎ひとりこのような拷問を免れたとは考えられず、彼の自白が拷問の末のことだったことは間違いない。三千余にのぼる被告人の供述は大半が事件直後の十一月のうちに終わっているというのに、逮捕第一号の福次郎が本格的な自供を始めたのは、訊問調書の日付によると十二月

九日のこと、捕われてからじつに四十日が経過している。この在地オルグが頑強に口を閉ざしつづけていたさまが想像されるのだ。福次郎が黙秘をつづけられなかった理由は、彼の前に否定すべくもない明らかな証拠がつきつけられたからであった。彼が長日月の末集めた数十人の入党申込証一束が、密告によって警察当局の手に入ったのだ。入党申込証の保証人欄には、すべて大野福次郎の自署が記されていたのだから、「もはやこれまで」と覚悟のホゾを固めたに相違ない。

その福次郎の変化の気配を敏感に読みとった取調検事堀田正人は、次のようにたたみかけていく。「然レバ本日はヨリ本官ノ尋ヌル処ハ真実ノ申立ヲ為スコソ智人ト云ハザルヲ得ザレバ有体ヲ明白ニ申立テヨ」

荒縄を腰にうたれて引たてられてきた福次郎の目蓋は青黝くはれあがり、鼻腔からは血がひと筋したたっていたが、彼の態度に臆するところはなかった。

「承知仕り候。有リン事ハ本日ナラヌ昔ヨリ真正ニ陳スル積リニテアリキ」

いったん口を開くと決心した以上、何で無責任な嘘偽りを並べたてよう、それは昔ながらの自分の信条なのだと、福次郎はキッと相手の目を見すえた。堀田検事の発言の中に、「智人」という言葉があることに注意しなければならぬ。「犬畜生」と扱った「暴徒」に対して、「智人」と検事に言わせるものが、暴徒福次郎の人柄にあった。それは四十日間の接触の中で検事が被告に寄せざるをえなかった畏敬の表白ではなかったろうか。

いったん決意のうへは、供述は澁みなく進み、そうしてできあがった福次郎調書は明治十七年

蜂起に加わった風布耕地の政治状況の全容を後世に伝えるものとして、文字通り彼自身の「総括」であつたといえる。そこには、拷問に屈した転向者の後ろめたさや懺悔者の湿った後悔はなく、全体がたんたんとして乾いた清潔さにおおわれている。たとえ蜂起は敗れ潰えたとはいえ、蜂起する以外にどんな行動の選択がありえたか、そのような確信と解放感に裏づけられたある自由の高みに福次郎の精神はのぼりつめていたことを、その供述の清潔さは語っているようだ。

風布耕地に足を踏み入れた私は、なによりも大野福次郎の墓に詣でてみたかった。生家の後背に展がる斜面の中腹、畠中の一画に福次郎の墓はあつた。

この山のいたるところに転がっていると同一秩父古生層の片岩、それを粗く鋭く削つてできた墓標は数十年の風雪に洗われ、不安定な斜面にあつて吹きすさぶ北風に抗うように佇立するさまは、そのまま故人の面影を映しだしているように思われてくる。短い冬の陽が山かげに去つて、夕映えの中で風か空に鳴り渡っていたが、それは風布の耕地に眠る無数の靈魂の一斉に絞りだす慟哭に似ていた。

蜂起前日の緒戦に仲間十二名とともに捕えられ、実戦に加わらなかつた福次郎に重懲役七年半が科されたのは、その虚偽を含まぬ自白から、風布組巨魁と断定されたためであつた。福次郎も、その重刑を甘受した。国家権力に屈してか？ そうではなく、敗れ潰えた蜂起に誘つた仲間の負つた災禍に対して、彼は重刑に服することで相對そうとしたのであつたらう。長い獄の辛い生活が、彼をほとんど廢疾の身に追いこんだ、そのことによって、彼は出獄して辛うじて耕地の人々

に對面しうる資格を保ちえたのもあった。村に戻った福次郎はまだ四十代の働き盛りであつたはずだが、すでにふたたび鋤をもつて斜面の畠に立ち働くことのできぬ病身となつていた。

農事を妻子に委ねた福次郎は、杖に支えられながら杜寺の世話役をつとめたが、それは事件前の姿と変りはしなかつた。耕地の祭事を司る者の資格は、耕地の人望を負うことと同じであつたから。峠にある釜伏神社の御神体を迎えるため遠く鎌倉宮に出向いたことが、彼の肉体の衰えを加速させたのは明らかだつた。それは予めわかつていたとしても、行くことが福次郎の「総括」の延長線上のこととして、周囲の何人も止めることはできなかった。事件が去つて十年、明治二十七年の春四月、釜伏神社のなおいの席で、突然吐血して福次郎は死んだ。本来ならば、まだ十分に働ける体であつた。

すでに自らの死を予知していたものか、晩年、福次郎は子息の半次郎に向かつて、

「どんな時でも、喜八郎んとこの仕事だけは、何をさしおいても手伝つてやってくんろよ。喜八郎はいきばでになつた身だからな」

と念を捺すように、くり返し言い遺していったという。いわば大野福次郎の遺言であつた。

## 2

いきばでという言葉に含まれる歴史の彼方のある残酷な位相とはべつに、私の耳にそれがある近接感をもつてひびいたのには、わけがあつた。秩父事件のなかの「暴徒」の何人かが、確実に、



私の生まれ故郷である信州佐久の地に「いきばて」たことを知っていたからである。秩父から神流川を遡り、十石峠を越えて佐久に入ってきた困民軍は、私の生まれた町の南端の小高い丘に陣どった高崎鎮台にいくいとめられ、阻まれて急に進路を変え、千曲川上流の東馬流ひがしまなかしの部落に拠って、最後の激戦の末、潰滅していった。その東馬流の村社に、いまでも数基の無縁仏が眠っている。

祖父が生きていた頃だから、私はまだ小学校にも上っていなかった。その頃、ひとりの老人がよく私の家にやってきたものだ。玄関のたたきに、深ゴムとよばれる大正時代に流行した幾分旧式な革靴が脱いである。蹠くるぶしのあたる部分が伸び縮みするゴム布になっているのだが、それはすてにゴム布の部分が伸びきっていて、だらりと口をあけている。靴墨はもう何年というもの塗られたことがなく、裏皮のようにささくれていた。玄関わきの掛け金にラッコの襟のついた羊羹色ようかんいろのトンビがかかっている。この二つが新津太平にいづ たいへい到来のシンボルであった。

新津太平は小規模な繭の仲買いを仕事としていたが、つなぎ資金に祖父の協力があつたらしく取引きの季節が一段落をつける恵比須講の前日、雉きしの番いつづをたずさえてやってくる。雉の雄鳥がたくわえている玉虫色の長い尾羽根が珍しく、私は老人の到来を歓迎した。綺麗な羽根を鉢巻の間にさしこむと、インディアンインディアンの酋長かんむりの冠となる。

私は感謝の意を表わすひとつの手だてをめぐらした。太平老人が茶の間の炬燵こたつで酒の接待にあずかっている間に、そっと靴磨きの道具をもちだして、あの深コムの靴にたっぷり靴墨を塗ってピカピカに磨きあげておいたのだ。深ゴムからは強い異臭が鼻をついたが、我慢した。深ゴム